

家庭教師が見た「コロナ禍」の下の子どもたち
—子どもを追い詰めるのは「教育改革」・新自由主義—

塚田正治（「教育産業」関係者）

〔I. はじめに〕

7月が終わった。筆者は「教育産業」で生計を立てているが、関係している生徒は全員夏休みに入っている。「コロナ禍」の下、首都圏の教育現場は3月2日の休校要請（以下「要請」）、4月7日の緊急事態宣言（同「宣言」）、5月25日の「宣言」解除（同「解除」）、それに伴う学校再開（同「再開」）といった経過を辿り、まさに激動の渦中に投げ込まれたが、私の周囲の生徒・保護者は一区切りついた形となっている（8/18 現在では2学期が始まった生徒もいる）。現在の情勢では学事日程は一樣ではないが、同様の生徒・保護者・「教育関係者」も少なくはないだろう。

この間、安倍首相の唐突と言うよりない「要請」は二人の自死者を出している。一人は25歳の女性（<https://www.asahi.com/articles/ASN50741HN5JULFA00X.html>）、もう一人は15歳の男性（<https://news.yahoo.co.jp/articles/b1d38f650273b17baf197ad8a6e46ce016b6a03c>）である。いずれも不登校の経験者で、再び学校に通うことで再起を図ろうとしていた人たちだった。

筆者はこの二人について報道以上に具体的なことは知らず、まさに生命の問題であるその自死について軽々に語ることはできない。しかし、報道を信じればその自死のきっかけは「要請」であり、「要請」が過酷な状況から立ち上がろうとするその生命力を根こそぎ奪ったことになる。とすればその衝撃度・破壊力を物語ることになるだろう。

前述のように筆者はこの二人の具体的状況は不詳であるが、これから述べる筆者の経験からも、「コロナ禍」における安倍政権の無責任な教育政策はまさしく破壊的であったと思わざるを得ない。であるからこそ、我々はその愚策というよりない「政策」が、教育の「主役」である子どもたち、そしてその子どもたちを育む立場の保護者に対して何をもたらしたのかを知らなければならない。そのための情報を伝えるのは当然、メディアの役割である。しかし、現在、その役割を十全に果たしているとは言い難い。この点は、前述の自死者の内、拳銃による自死を遂げた二人目の男性についての報道が拳銃の入手ルートに偏していることが象徴的に示している（前記のリンク先参照）。

筆者はこの間、従来から家庭教師を担当してきた生徒の大半を引き続き担当していた。保護者はオンライン授業を希望した一軒を除き、すべて従来の「訪問型」の授業を希望

し、ご家庭に伺う形で授業を行うことになった。この状況は「要請」期間中においては大半の「教育関係者」が生徒との接触を断たれるか、接触機会がネットを介したパソコンの画面越しに限定される中、生徒と「リアル」の場で直接、接するという稀有な体験をもたらした（尤も、「リアル」な接触という点では、後述の D 君の例からも少なからぬ塾関係者などが同様の経験をした可能性はある）。しかも、その場はご家庭であり、「要請」により家の中にいわば「閉じ込められた」形になった子どもと保護者がどういう状況にあるか、垣間見ることにもなった。「再開」後においても、元々、家庭教師の独自性は生徒の「ホームグラウンド」であるご家庭で授業を行う点にあることもあり、様々な生徒の声に接することになった。

本稿はこの間、筆者が見聞した子どもと保護者の状況をまとめたレポートである。もとより内容は筆者個人の限られた体験に基づくものに過ぎない。また、いずれも私立校在校生であり、そもそも家庭教師を依頼できるという条件から、対象は経済的に恵まれたご家庭の子どもたちに限定される。また、学校現場も壊滅的と言われるほどの混乱状況だったと^{そくぶん}仄聞する。この点は後述の筆者の経験からも肯けるが、筆者は具体的状況を把握しておらず、全くとお伝えすることはできない。

以上のように不十分な点は覆い難いレポートであるが、前述のようにメディアが十全に機能しない現状では、現状の周知の上で一定の意義を有するものと考ええる。そして、何よりここで取り上げる子どもたちも世代的な問題に即して言えば、大人が選んだ政権の教育政策と大人が造った新自由主義社会の被害者である。子どもたちが安心して学び、自らの生を築いていける社会を作る上で、到底、看過されていいとは思われない。

拙いレポートではあるが諸賢のご参考に供すれば幸いである。なお、本稿では基本的に子どもの置かれた状況をレポートするため、学校に対して批判的とも受け取られる記述をせざるを得ないこともある。しかし、学校現場が既述のような状況にあったことは承知しており、基本的に責を負うのは現場ではなく、まずは安倍政権と（私が担当した生徒はすべて都内の学校に通学していたため）小池都知事と考えている。また、生徒の学年は 3 月の「宣言」時のもので、2 月で契約が終了した A 君を除き、現在では全員が 1 学年進級していることを確認している。

〔Ⅱ. A 君（中 2 男子）－「僕は、仙人になるんだぁ」－〕

まず、某大学付属校に通っていた A 君を取り上げる。担当したのは 2 月までで、3 月の「宣言」以降は接触がない上に担当期間も 2 か月に過ぎない。にもかかわらず、取り上げる理由は後述する。

学校が付属する大学は MARCH（明治・青山・立教・中央・法政）の一つで偏差値レベルでは早・慶・上智に次ぐレベルとされている。付属高校からの内部進学率もそこそこには

あり、大過なく学校生活を送れば「エスカレーター式」でそれなりの学歴を身につけられるはずだった。

ところがA君は中学入学後、中間期末テストで全く得点が取れなかった。筆者が見せてもらった成績表の評価は、体育などのいわゆる「実技系」の科目を除けばすべて「1」「2」だったと記憶している（5段階評価）。中2の2学期末（12月）に校長面談が行われ、「3月の学年末試験で所定の成績が挙げられなければ退学させる」と「宣告」された。このため、保護者が1月から全試験科目に家庭教師をつけて対策することになり、筆者もその中の一人として派遣された（担当は社会）。

まず、問題になるのはそもそもなぜ、点数が取れないかということである。中間期末テストを見せてもらったが、特別、難易度が高いというわけではない。学校の先生も授業内容を復習するためのプリントを出しており、その内容を「覚え」れば一尤も最低限の事項内容も踏まえない、いわゆる「棒暗記」では無理だが一正解できる問題と思われた。1・2回、授業をして分かったのは、まず、どうも家庭学習の習慣がないらしいということだった。家庭教師の授業が始まっても話題をそらしたり、いつの間にか勉強以外の行動を始めたりと、なかなか勉強に集中しようとしないう。話を聞いてみると、「何で学校が終わっているのに、机に向かわねばならないのか分からない」ということのような感じだった（ちなみに、A君はいわゆる素行の面での問題は全く指摘されておらず、学校の授業中は少なくとも静かにしているようだった）。

また、現在の私立校で使われている形式のテスト問題を解くという経験も不足しているようだった。学校の先生は復習用のプリントを毎回、配布しているのだが、それがそのまま出題されるわけではない。任意の例を挙げれば、プリントに「1877年に西南戦争を起こした人物を答えよ」という設問があったとする。この問題がそのまま出題されれば、プリントさえ演習しておけば「西郷隆盛」と正解することができる。しかし、仮に「1874年の（①）」などによる（②）提出によって自由民権運動が始まった。1877年の（③）戦争において（④）が敗れると、この運動はますます盛んになっていた。」という形で出題されると、事はそう簡単ではない。先のプリントの問題の知識を「活用」するだけでも、この一文に目を通し、どこに「西郷隆盛」が入るかを判断しなくてはならない。一文は通常の記事であり得ない「虫食い」である上、現在のテストの文字数は膨大であり、判断に使える時間は乏しい。現在のテストでは当該の一文を読んだだけでほぼ瞬間的に「④が西郷隆盛」と判断できるようでない、全問解くのは難しいだろう。しかし、近代史をほぼ初めて学習する生徒にとってはかなり難しい作業である（ちなみに、①は板垣退助、②は民選議院設立建白書、③は西南が正解。ちなみに③を西南戦争とするのはケアレスミス扱いで×である）。対応するには「テスト用」の訓練が必要になるが、A君はそういう訓練が乏しいようだった。

数回、授業をし、保護者とも話す中でA君が点数を取れない基本的原因がはっきりした。彼は中学受験をしてないのである。付属小学校の出身ということだった。中学受験経験者であれば、家庭学習の習慣づけや「テスト用」の訓練は塾などで叩き込まれているが、彼には

そういう経験がない。しかも、小学校はかなり伸びやかだったようで、例えば雑談中に小学校時代の旅行の話がよく出てきた。担当科目が社会だったので授業中に海外の地名が出てくるともよくあるが、「ああ、そこ行ったことある」という返事がよく返ってきたし、国内である中学の修学旅行の候補地（生徒が選択する）は「全部、行ったことがある」とのことだった。塾に通っていれば講習の合間に寸暇を惜しんで旅行するという形になるが、彼の場合は長期休暇中もスケジュールに追われるということはなかったようだった。したがって、「何で学校が終わっているのに、勉強しなきゃいけないんだ」という認識になるのはある意味で当然のことなのである。

しかし、MARCHの付属校で「エスカレーター式」で高学歴を得られる学校となれば、偏差値が低いわけがない。もちろん、その時の情勢によって進学校と大学付属校の人気には変動があるが、同級生・同窓生の大半は塾などで厳しい訓練を経てきた生徒である。私立校では付属校からの内部進学者が勉強に対応できなくなるケースがよくあるが、A君も外部から入試を経て入学してきた生徒との競合関係に対応できず退学を「宣告」された形であった。

とはいえ、伸びやかな小学校生活が悪いわけがなく、それが原因で退学になるのは本人の責任ではあり得ない。A君の勉強態度は明らかに集中力を欠いたが、単に訓練不足のためとは思われない。理不尽な状況で本人から見て高いハードルを押し付けられれば前向きになれるわけがないということであろう。授業中も彼は間欠的に様々な話をして授業を脱線させたが、唐突に

「僕は、仙人になるんだあ」

と高らかに宣言したことがある。状況は認識していたので「ああ、いいかもね」と受け流したが、本音を言えば「下界で勉強なんてやってられないよ」といったところではなかったかと思っている。

しかし、現状では学年末テストで所定の点数を取るよりない。状況を整理して本人に少しずつ話していくと、本人もこの点は納得してってくれたようで、テスト直前期には授業開始時よりはかなり集中して勉強に取り組むようになっていた。状況が厳しいことは否めなかったが、前述のようにテストの難易度が高いわけではなく、逆転の目はあるのではないかと思って契約を終了した。

その直後に「要請」が行われた。その後の接触はなく、「要請」以後の激動の中で彼がどのように過ごしているかは把握していない。にもかかわらず、最初に彼を取り上げたのは、「要請」発出時、安倍首相にはこういう生徒の存在が全く念頭になかったはずだからである。通常の例から言えばA君の学校の学年末テストは中止になったはずである。つまり、A君は学校での「居場所」を確保するための最後のチャンスを奪われたことになる。そして、仮に校長の「宣告」が機械的に適用されればA君は退学になる。「要請」発出に伴う会見の際、卒業前に友達との思い出をつくる機会を奪うから「断腸の思い」とであると、上っ面でステレオタイプの、つまり内容空疎な「学校観」「子ども観」しか示さなかった

(https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/statement/2020/0229kaiken.html) 安倍首相が、自分の「要請」が一人の中学生を最終的に退学に追い込むかもしれないなどと考えていたとはとても思われない。

しかし、仮に退学になったとしたら「要請」は A 君にとってどういう意味を持つのだろうか？元々彼は学校から事実上、「お前なんかの面倒は見られない」と言われていた。その上、一生に関わる重大な局面に立たされているにもかかわらず、一国の首相から全く考慮の外に置かれていたとすれば、国から「お前のことなんか知ったこっちゃない」と言われているのと同じことにならざるを得ないはずである。

A 君の置かれた状況は、「要請」また「コロナ禍」における安倍政権の教育政策が、事実上、子どもたちを「out of 眼中」（かなり古いが）の扱いにしていることを物語っている。

〔Ⅲ. B さん（中 3 女子）－「期末、やりたいですよお」－〕

B さんは都内の中堅進学校（女子校）に通っている。幼児期の手術によって現在のところ学校生活に大きな影響はないが、心臓に先天性の疾患があり保護者（母親）から学校生活の負担を可能な限り軽減したいとの希望を何度か伺っている。中学入学後には通学の負担を減らすため、学校の近くに母親と B さんで転居したぐらいである（父親は元のお宅にお住まいだが、同じ都内なので父娘の交流は頻繁である）。本人は自分のことを「ビビリ」と称しているが、後述の「コロナ禍」における言動から見ても、眼前の事態よりも時間的に先の事態やその事態を生み出す社会の在り方に鋭敏なのだと思われる（ただし、必ずしも社会の在り方に批判的というわけではない）。この点はやはり疾患が根本的要因なのかもしれないが、中学校の担任からも「芯の強さを感じる」と成績表で評価されており、大人びた印象を受ける。

筆者は小学校 5 年生の時からこの生徒さんを担当している。家庭教師を依頼する際の定番だが、中学受験を目指して大手塾に通っていたものの成績が低迷したのである。受験科目の全教科に家庭教師がつくことになり、文系科目は筆者が担当した。ただ、こういう場合、一般的に家庭教師の役割は塾のフォロー（補習）になるのだが、担当直後に塾を退塾し家庭教師のみで中学受験に挑むことを告げられた。詳細は記憶していないが、前述のご希望によるものではないかと思われる。幸い、志望校に合格したが、筆者はその後家庭教師を担当することになり、中学 3 年間授業を継続した。前述のように塾などの補習の形をとることも多い中、家庭教師単独の指導となったこと、入試を終えても長期に渡って指導が続いていること、などから、筆者にとっては縁深い生徒と言える（なお、現在の担当は英語を中心に文系科目全般）。

中学入学後は一貫して学年上位の成績を維持し、いわゆる「実技系」の科目を除けば、5 段階評価でほぼ「5」（まれに「4」）の成績を取ってきた。とはいえ、これはあくまで結果で

ある。筆者は、中学3年間を通じて週1回、授業でBさんの横に座りながら、行事・テストなどがびっしりと詰め込まれ、課題をスピーディに消化しなければならない学校生活への不安を聞き続けてきた。「コロナ禍」が本格化する前の1月の段階でも、風邪と通常の季節性インフルエンザの流行で学級閉鎖や教員の病欠が相次ぎ、「この先、どうなるんですかねえ」とため息をついていた。授業は進まないのに期末は刻一刻と近づくのである。

このようにBさんは「生真面目」と言えるぐらいにテスト対策を気にする生徒であった。これは「ビビリ」と自称する気質もあるが、やはり中学受験を経験していること、塾時代に成績が低迷したことが大きいと思われる。Bさんは、ちょっとした勉強の遅れが将来の大学受験を直撃することを知っているのである。それは実社会での有力な生活基盤が奪われるということでもある。尤も、後述のD君のように同じように中学受験で苦労しても、休校期間を「満喫」する生徒もいるが、Bさんは中学入学後、好成績を維持していたし、また疾患を抱える身で、社会で自立していく上で、学歴の意義はやはり大きいと認識していたのであろう（このBさんにとっての学歴の意義の大きさは折に触れ、母親が強調していたようだった）。そのBさんにとって、分刻みのスケジュールをこなさなければ「脱落」してしまう現在の学校生活は、元々、それだけでも過酷なものだった。前述のように母親は学校生活の負担をできるだけ軽減しようと努めてきたが、本人にとっては不安と隣り合わせの学校生活だったのである。

そこへ「コロナ禍」が襲ってきた。Bさんのため息はますます深まった。元々疾患を抱えているBさんは保健衛生に敏感である。学校が「コロナ対策」を講じるようになると「教室が気持ち悪い」と洩らすようになった。学校では教室入室時などに手のアルコール消毒が励行されているようなのだが、皮膚がアルコールに過敏に反応してしまう生徒もあり（実は筆者もそうである）必ずしも徹底されていない。「そういう子は近づかないでよ〜と、つつい思っちゃうんですよね」と言っていた。

その上、期末直前期の学校は、1月のBさんの懸念通り、多くの授業が期末範囲を消化しきれていなかった。生徒の多くは「直前詰め込み」でテストに臨まなければならないが、「ビビリ」なBさんにとっては精神的負担が大きい。その上、「コロナ禍」の下、未経験の事態が起これば、Bさんとしてはますますどう対処したらいいのかが分からない。そのくせ、中学生としての基本的評価は依然としてテストの点数で決まるのである。不安が強まるのは当然だった。

「要請」についての第一報がネットで流れたのは2/27（木）だった。その日はたまたま授業日で、スマホで情報を確認した筆者は授業後、「ひょっとしたら、学校が休みになり、期末もなくなるかもしれない」と告げた。Bさんは「え、本当ですか!」と驚き、「ぎゃ〜、これまでの私の努力は何だったんだ!？」

と叫んだ。この時は期末がなくなるかどうか、まだはっきりしなかったもので、声には明るさがあったが、ふだん、おとなしいBさんの大声はその衝撃の大きさを示していた。前述のようにBさんは、今回の期末を含め一貫して学校生活への不安を漏らしてきたが、それは

十分な準備もできないままテストに突入するかもしれない状況への不安である。願ってきたのはこのような状況の改善であってテストの廃止ではない。むしろ、Bさんはこのような状況・不安を乗り越え、テストで成果を挙げようと中学生を送ってきたのである。「要請」が期末テストを奪うとすれば、テストに向けての努力はもちろん、このような不安・葛藤の意義さえ奪うものだった。「何が起こるか分からないけど、落ち着いて対応しよう」と気休めの言葉をかけたものの、「要請」はBさんから学校生活を根こそぎ奪ってしまった。

一週間後、授業に行ってみると、Bさんはボツリと

「すべてが一瞬の出来事でした」

と呟いた後、

「期末、やりたいですよ」

と悔しさを身体の内から絞り出すようにして言った。それでも「今できることをやっていこうよ」と声をかけると「はい」と肯いた。

しかし、休校後の学校は混乱を極めた。中3時の学年成績は2学期までの成績に基づくことになり、懸念していた3学期期末テストはなくなった。しかし、学校からは休校に入った直後に「休校明けにテストをするので宿題をしておくように」との予告があり、Bさんとしては準備をしなければならない。にもかかわらず、宿題は一向に送られてこなかった。

「私はどうしたらいいのでしょうか。」とBさんは当惑の表情を見せるしかなかった。映像授業やオンライン授業が始まっても接続切れが相次いだ（念のため確認すると、映像授業は録画した授業をネットで配信するもの、オンライン授業はネットを介してライブで授業を行うもの）。高校入学後、初めてのクラス顔合わせがオンラインであったが、スマホで参加していたBさんのみ接続が切れ、一人だけ「消える」ことになった。顔合わせ終了直後に担任からフォローの電話があり、本人も「気にしていない」とのことだったが、円滑な学校生活には程遠い状況であった。また、映像授業はBさんにとっては教える側が授業を通して何を伝えたいのかが把握しづらく、漫然とした印象のようだった。これはテスト対応的には出題ポイントがつかみづらいということであり、「何をどう勉強していいやら」とため息をついた。前述のようにBさんは学歴の意義を重く認識していたと思われ、それは疾患を抱える身にとって将来の生活基盤としての意義を持っていたと見られる。しかし、学校はもはやBさんの人生を守るどころの状況ではなくなっていた。

ただし、筆者が知る限り、この間、Bさんを最も驚かせたものは「アベノマスク」である。授業の休み時間にこの話題になったのだが、具体的内容を知るとBさんが「え、一人100枚とかじゃないんですか!」と大声をあげた。前述のようにBさんは普段おとなしいのだが、安倍首相は「要請」に続き二度、大声を上げさせたことになる。とはいえ、これは安倍政権のあまりのデタラメぶりにBさんが驚愕したということに他ならない。すったもんだの挙句に布マスク2枚しか配らない安倍政権は、生活基盤どころか心臓疾患を抱えるBさんの生命・健康さえ守らないことを改めて露呈したのである。4月も後半になると「連休明けまで休校が続いたら気が狂います」と洩らすようになったが、5月に入っても学校は再開

されなかった。

5 月も下旬の 25 日になってようやく「再開」を迎えたが、今度はテストの山が待っていた。学校としては勉強の遅れを一刻も早く取り戻さねばという意図なのであろうが、テスト範囲は前述の散漫な映像授業の内容である。場合によっては、2 週間前の授業内容の時もあったが、普段の中間・期末テストは直前までの授業内容が出題される。授業後、新しい授業内容が頭にインプットされているのに、その前の内容をテストされる経験は B さんにはなく「(2 週間前の映像授業で) 何をやったかなんて、覚えてませんよ」とぼやいた。

その上、「最大限」の感染対策を講じたと思われる学校の教育環境は非常に過酷なものだった。教室は生徒の机周囲と、教壇と生徒の机の間にビニールカーテンを張っているらしいのだが、おかげで非常に暑苦しい。B さんの話では 6 時間目になると先生も朦朧としているとのことだった。前述のように、元々、B さんは「密」な教室を「気持ち悪い」と言っていたが、仮に感染リスクが軽減されたとしてもこれでは「不快」なことに変わりはない。その上、休み時間には生徒が会話をしない（飛沫を飛ばさない）ように先生が見張っているらしく、気晴らしのちょっとした会話もできないとのことだった。実際に一回咳をただけの生徒が出席停止になったそうである。こうした中で分散登校が終了し、「密」な教室が再現された。

6 月 19 日に東京都の休業要請が最終的に解除され再び感染者数が増えだすと、B さんは遂に持ち堪えられなくなった。「とにかく教室が嫌だ」という気持ちを抑えられず、授業を最後まで受けることができなくなった（保健室で休養）。朝から「学校に行きたくない」という気持ちが沸き起こるようになったのはそれからすぐだった。元々母親は子どもの負担を最小限に抑える方針だったし、実はこの学校の当時のシステムは、登校して授業途中から保健室で休養するよりも、登校しない方が成績的に有利だった。授業途中で休養すればその授業は欠課になるが、登校しなければ「コロナ禍」による「登校自粛」扱いになり欠課がつかないのである。欠課の数は将来、大学の推薦入学の資格を得る上でも重要な要素になる。B さんは学校を休むようになったが、すぐにその頻度は 1 日おきになった。一方で 7 月の期末は否応なく近づいて来る。欠課はつかなくても期末テスト（及び中間テスト）の成績が悪ければ推薦は得られない。「登校自粛」した生徒を守る措置まで学校も教育行政も手が回っていないのである。

7 月に入るとついに B さんは学校に全く登校できない状態になった。家庭教師の授業も中止になり、筆者は B さんと直接、接触できない状況になった。最後の授業の時はこちらのジョークに声を立てて笑ってくれる場面もあったのだが、精神的にはもはや限界だったのであろう。

その後、B さんは成長に伴う心臓の再手術を 9 月に受けることになり、8 月上旬現在はそれに備えている。再手術自体は「コロナ禍」前から予定されていたが、手術準備のための検査数値はあまり良くなかったようで、「コロナ禍」での精神面の不調の遠因には心臓の機能低下もあったようである。現在のところ、家庭教師の授業は 10 月に再開予定ということに

っており、筆者は母親とメールで定期的に連絡を取っている。

この間、Bさんは7月の期末テストを受験しなかったと言う。3月に「期末を受けたい」と言っていたことを考えれば「コロナ禍」の4か月の影響がいかに巨大であったかがわかる。また、朝から自室にカギをかけて出てこないこともあったらしい（夜に入り母親がカギ業者に依頼してカギを開けた）。元々自宅にいたので、自室に籠っても「新型コロナウイルス」の影響に大差はないから、Bさんを追い詰めているものが単にウィルスではないことが分かる。この点は最後に改めて述べる。

〔Ⅳ. C君（小4男子）－「疲れた」－〕

C君は都内の私立小学校に通っている。小学校は中学の付属ではないため、私立中受験を目指して御三家などの合格実績で有名な某大手塾にも通っている。つまりC君は受験学年ではないものの、2年後に受験を控えた立場で「コロナ禍」に襲われたことになる。もしあなたが「まだ2年先じゃないか」と思ったとしたら現在の中学受験を知らない証拠である。どこの大手塾でも受験に向けて3年カリキュラムを組んでおり、その間、合格に必要な知識・ノウハウがびっしりと詰め込まれている。当然、4年生末～新5年生（塾などでは2月から「新5年生」という位置付けになることが多い。入試が6年生の2月にあるためである）のカリキュラムも合格に不可欠であり、そこに「穴」があれば合否を直撃する。

さて、前記のようにC君は大手塾に通っていたのだが成績が低迷。元々家庭教師がついていたのだが、さらに補強されることになり、筆者もその一人として派遣された。今年の2月のことでちょうど「コロナ禍」が取り沙汰されだした頃のことである（担当科目は国語・社会）。

3月の「要請」によって学校は休校となったが、塾は対象に入っておらず、対応は二転三転した。当初は一週間休業して再開という話だったが、感染拡大が止まらないと判明するやまた休業という具合。この間、本来授業で演習するはずだったテキストを家庭での勉強せざるを得なくなり、C君の保護者（主として母親が勉強面を担当）は学校だけでなく塾への対応にも振り回された。「とにかく今週は疲れました」というのが、「要請」から一週間後の母親の感想だった。C君にはお姉さんがおり、母親からすれば一日中、子ども二人の面倒を家で見なければならない上に、学校と塾の対応に振り回されるのである。4月の「宣言」・東京都の休業要請によって塾も完全に休業となった。

すでに3月の「要請」から数日でC君は

「もう、飽きたあ」

とぐずっていた。まだ10才なのに家で缶詰である。その後は生活リズムが崩れ、朝、5・6時ごろに目が覚めてしまい、日中に眠くなってしまったり、逆に日中、寝てしまった結果、夜眠れなくなったり、といった状況になってしまったこともあったようだった。しかし、4月の「宣言」後は段々

「疲れた」

と言い出すようになった。理由を聞くと「とにかく勉強ばっか」。暇さえあれば母親がプリントを演習させていると言う。実際、筆者の授業も当初の週1回から週2・3回に増えていた。自分の授業が増えたから言うわけではないが、母親としてはそうせざるを得ないのである。元々、塾の成績が低迷している上に、前述のように「穴」ができれば致命傷になりかねない。そもそも塾での勉強が上手くいっていないのだからできれば休業中に態勢を立て直したいという思いもある。何より一人で子ども二人の面倒をこまめに見るなんてことはできない上に、父親も在宅勤務になって家にいる（C君の話では「お父さん、給料減って家でゲームばっかしてる」とのことだった）。「勉強しなさい！」と子どもを机に向かわせなければ家事の足手まといになるのは必至なのである。一度、C君が授業に集中できなさそうだったのでストレッチをさせてみると「あ〜あ、身体を伸ばすって気持ちいいなあ」としみじみ言っていた。運動不足だったのだろう。

学校は私立ということもあり、ネット環境が整わないと言われる公立と異なり、5月にオンライン授業が始まった。C君に感想を聞いてみると、即座に

「つまんない」

と断言した。C君はゲーム・アニメ・プラモ作りが趣味で読書経験が乏しいこともあり、普段の授業ではっきりものをいうことはあまりない（子ども同士の会話の時は分からない）。いつもは質問すると「うーん」と言葉を選んだ後に回答するのだが、この時はまさに一瞬で答が返ってきた。理由を聞いてみると

「だって、友達としゃべったり、ハイハイって手を挙げて黒板に答えいたりできないんだもん。」

とのことだった。これは要するに現在のネット教育環境では友達同士で直接、交流することができないということだろう。前半の友達とのおしゃべりはもちろんだが、後半の黒板に答を書くというのも、単に答を書くことだけが問題なのではなく、正解して友達から「すげ〜」と称賛されたり、逆に間違えていじられたりといった経験ができないという趣旨と思われる。Zoomなどを使った現在のオンライン授業の形式では教師と生徒一人一人がコミュニケーションするだけなので、こうした経験ができないのである。しかし、とりわけ低年齢の小中学生にとっては非常に大きな問題なのだった。

さらにオンライン授業については

「疲れる」

という感想も漏らすようになった。15分程度の朝礼でもかなり疲れるという。最近、ようやく報道されるようになったが

(<https://www.asahi.com/articles/ASN5Y3JH8N5XUHNB00N.html>)、これは授業中、視線をパソコンの小さい画面に釘付けにされることが大きいのだろう。教室での授業であればちょっと戸外の風景を見たり、友達にちょっかいを出したりして、気分を変えることもできるが、オンラインではそうもいかない。この点は教師とのやり取りさえできない映像授業で

はなおさらと思われる。

ちなみに塾の方では学校に先駆けてオンライン授業・映像授業が導入されたが、授業後に母親が内容を聞いてみると、全く覚えていないということだった。前記のようにこの塾はいわゆる「名門塾」で授業・テストの難易度が高いのだが、元々成績が低迷しているということは塾の授業内容が（テストで点数を取れるほどには）理解できていないということになる。その上、聞いているだけでストレスがたまるオンライン授業・映像授業ではますます上の空になるのはある意味で当然であろう。

とはいえ、前述のように「穴」は致命傷になりかねない。母親としてはそのままにしておくわけにいかず、C君が授業を理解できるようにサポートしようとしたのだが、これがとんでもない負担となった。まず、この塾のオンライン授業は保護者が一瞬でも画面に映り込めば接続を切るシステムになっていた。どうも「授業は子どもが一人で受けて自分で理解すべきもの」という方針らしいのだが、C君にとってはこの方針自体が無理難題である。結局、母親は子どもが内容を理解しないままパソコンの画面を見ているのを数時間、眺めた後、授業終了後に自分のできる範囲で授業内容を一から子どもに教える羽目になった。映像授業の方は一緒に見るのが可能だが、「企業秘密」である授業内容の漏洩を防ぐためか、授業終了直後に映像は削除された。映像授業の長所は「何回も見返して分からないところを復習できる」点だが、この特長は全く活用されない形になっていた。このため、母親はスケジュールを調整し、映像授業が流れている間、子どもの横に座って授業の理解をサポートせざるを得なくなった（とはいえ、授業の流れや意図がつかめているわけではないので、サポートの効果には限界がある）。子どもと母親の負担は膨大なものになり、「再開」直前には「この子、緩んじゃって仕方ないんです！」と母親が訴えてくることもあった。ストレスが鬱積しイライラが子どもへの不満に変じたのだろう。

5月の「再開」、6月の東京都の休業要請解除によって学校・塾が再開された。塾の再開初日はいきなりテストだったそうで、塾がとにかく遅れたスケジュールを取り戻そうとしていることが分かる。ただ7月のテストでは一定度、成績が上がり、「要請」中の努力が実を結んだ側面が見られる。現在は学校が夏休みに入り、塾の夏期講習に通っている。

〔V. D君（中2男子）―「今日だけで、家庭教師の他に6時間、塾があるんですよ！」―〕

D君は付属している高校が毎年、東大にも合格者を出している都内上位の進学校に通っている。筆者が担当したのは6年生の受験時からである。ご多分に漏れず大手塾に通っていたものの成績が低迷したのである。幸い、対策が奏功し本来の志望校（いわゆる「本命校」）に合格した。しかし、現在の受験戦略では「本命校」の上に「チャレンジ校」（「理想校」）と言われる受験校を設定することがよくある。緩みを防ぐために「本命校」より難易度の高い目標校を設定するのである。塾の指導でD君も「チャレンジ校」を設定していたが、「本

命校」とは入試日程が異なったこともあり、こちらも受験した。受験機会は 3 回あったが（現在の中学入試では受験機会が複数あることが普通）、3 回目で合格を勝ち取った。当然、6 年後の大学受験の上ではこちらの方が有利（授業について行ければだが）なので、進学することにした。つまり現在の通学校はこの「チャレンジ校」である。

しかし、中学入学後の成績は低迷した。元々、テスト対応力の点では実力より上の学校である。また、保護者は高齢（両親とも恐らく 60 代半ば前後）で学校・教育の現状に詳しいとは言えない。保護者もこの点は自覚しており、フォローのために中学入学後も引き続き筆者が起用されたのだが、やはり混乱が相次いだ。さらに世代の問題もあり保護者は礼節に厳しい。母親の気性が激しいこともあり、D 君にとってはいわゆる「箸の上げ下ろしまで口を出される」形になる。小学生の時はまだおとなしかったが、中学生になると D 君も反発するようになった。とはいえ、「事件」（「虐待」やいわゆる家庭内暴力など）が起きたわけではないが、ご家庭に伺うと家の外まで親子の怒鳴りあう声が聞こえてくることもあった。

また、筆者の印象では D 君は言葉の認識や理解が得意ではないようだった。例えば英単語集などを見ても開いているページの中から自分が探している単語を見つけるのに比較的時間がかかる。国語でも少し論理構成が複雑だったり、馴染みのない言葉が多く使われている文章を読んだりするとすぐに寝てしまった。父親が文庫本を勧めると「ボクは文字を読むと疲れてしまうんだ」と返したとのことである。中 2 からは古文・漢文が本格化するが、聞きなれない言葉が頻出するせいか、授業内容以前にそもそも授業を受けた記憶自体がないようだった（現在はメールなどでその週の授業の単元や課題を確認する習慣をつけており、授業の存在自体は記憶）。原因はよく分からないが、ゲームやアニメが趣味で読書経験がさほどないことが影響していることは確かだろう。しかし、現在のテストは短時間で大量の文字数を読解したり、本文を事実上抜き出すだけでは対応できない抽象的な記述力が求められたりする。幸い、筆者の担当科目（現在は国語）は大きな問題はなかったものの、他科目では赤点を取ることも度々あった。

つまり、冒頭の A 君のように「最後通牒」（退学「宣告」）を突き付けられたわけではないが、学校生活の継続に不安がある中、「コロナ禍」に襲われたことになる。尤も、本人は不安を示すことはなく、「要請」後、最初の授業で期末が中止になったことに触れると「勝ったぜ！！」とガッツポーズを見せた。これで勉強に追われず、「自由」な生活を送れるという趣旨であろう。学校からはすぐに宿題の指示が出たようだが、翌週の授業で取り組み具合を聞くと「宿題？ やってませんよ。」と休校期間を満喫しているようだった。前述の B さんとは対照的だが、既述のように D 君は中学入学後も成績的に厳しい状況が続いており、「勉強なんて最低だ！」「テストなんてパワハラだ！」と学校・勉強（テスト）への憤懣をぶちまけることもあった。頑張っても報われないのなら、束の間の「自由」を思う存分楽しもうということだったのかもしれない。

学校の混乱は D 君の通学校でも同様であった。例えば春休みの宿題は当初から予定していたものをそのまま配布したようだった。春休みの宿題は 1 年間の学習の総復習が趣旨だ

から、当然、3 学期の授業内容の習得が前提になっている。しかし、「要請」によって 3 学期の授業は事実上、行われなかったのである。必然的に全てではないものの全く解けないページがいくつかあるということになる。いつまでも「自由」を満喫しているわけにもいかず、消化しなければならないが、これでは手も足も出ない。結局、こちらで解説して終わらせたが、家庭教師がついていなければますます学習意欲が殺がれたのは必至である。

D 君のこれまで紹介してきた生徒と違うもう一つの特徴はご家庭がオンライン授業を選択されたことである。私が業務委託契約している家庭教師センターは「コロナ禍」以前からオンライン授業の導入を積極的に進めており、いつでも変更可能な状態にあった。D 君のご家庭は 3 月までは従来の「訪問型」の授業を継続されたが、4 月に「宣言」の発出が取り沙汰されるようになると、オンライン型に変更になった。筆者にとっても初めての経験で家庭教師センターからの研修を受けて、不慣れな形で授業を進めることになった。

D 君のご家庭がオンラインを選択されたのは、年齢的に保護者の感染・重症化リスクが高いことによる。ただし、前記のように他のご家庭でもオンラインへの変更は可能だったが選択されるご家庭はなかった。そもそも家庭教師の授業は勉強部屋に生徒と二人でいるだけである。「濃厚接触」ではあるが家庭でもよくある状況で、マスクをしていれば特に抵抗感示されなかった（ただ心臓疾患や年齢から生徒・保護者の感染リスクが高い B さんと D 君の場合は手洗いとうがいを求められた）。大抵の保護者は「他の方はどうしておられますか？」と確認するぐらいで積極的な関心を示すことはなかったし、中には「オンライン授業って良くないと思うですよ」とその質に懸念を示す保護者もいた（どこでもトラブル続出だった学校の映像授業・オンライン授業導入以前の話）。はっきりとは言わないまでも「パソコン越しで授業なんてできるのか？」という不安はどの保護者も持っておられたのではないかと思う。

そして、やっぱり他の保護者の懸念・不安は当たっていたのである。生徒から見たオンライン授業（映像授業）の問題は B さん・C 君の項で触れたとおりだが、教える側にとってもこのシステムはとにかくやりにくい。

筆者にとってはまず授業準備の段階から大変だった。D 君の場合、当方の授業は学校の宿題・課題のフォローである。当然、教材は学校が配信（4 月以降は学校配布のタブレットなどに教材が配信されることになった）した課題になるのだが、「訪問型」なら一緒にタブレットを見ればよい話である。しかし、オンライン型となると事前にこちらに送ってもらわなければならない。課題自体を転送することはできないようで、写メールで送ってもらうのだが、勉強に積極的とは言えない D 君にとってはそれだけでも結構、面倒くさい作業である。勢

い、サボりがちになり「先生、この宿題はボク、分かったから大丈夫ですよ」で誤魔化されることになる（当然、何も分かっていないのである）。また、仮に学校からの課題配信がこちらの授業直前だった場合などは、D 君にも授業前に課題を送る時間的余裕がない。授業が始まってから課題を送ってもらわざるを得ないが、その分、実質的な授業時間は減る上に

こちらの準備も十分ではないから、非常に非効率的になる。

授業が始まってもとにかく不便の一語である。なんせ、見えるのは生徒の顔の周りと手元（この家庭教師センターのオンライン授業では書画カメラが導入されており、カメラの切り替えにより生徒のノート・答案などへの筆記状況が確認できる）だけである。生徒の状況を把握するための視覚情報は、「訪問型」に比べ圧倒的に不足している。例えば、D 君は整理整頓が苦手に必要な教材が即座に出てこない時がある。「訪問型」なら書棚や机周りを一緒に確認すればいいのだが、オンライン型だと D 君一人で探してもらわねばならない。ところが整理整頓が苦手な人によくあるように D 君は探し物も苦手である。結局、「●●のプリントあった？」「まだ、ないっす」「見つかった？」「まだっすねえ」のやり取りをしばらく繰り返すことになる。

また、問題を解こうと D 君がちょっと前屈みになるとカメラの外へ消えてしまう。快調に解いているのか、苦戦しているのか、躓いているとすればどの辺なのかといった点を把握することは全く不可能である。とはいえ、芸能人じゃあるまいし、常にカメラの位置を意識して行動しろなんて指示は集中力を削ぐだけである。結局、頃合いを見て「調子はどうだい？」「難しくないかい？」と声をかけて確認するのだが、横で演習の様子を見ていた方がよっぽどきめ細かく D 君の状況を把握できる。

さて、演習によって課題が見つかったも対応がまた一苦労である。課題を教えてくれるのは誤答だが、前記のように筆者の担当が国語であるから文章読解に問題があることになる。当然ながら、修正のため理解に問題がある箇所をもう一度読んでもらわざるを得ないが、「訪問型」なら「ここをもう一度読んでみて」と指で指せばいいことである。しかし、「オンライン型」ではそうはいかない。「●頁の●行目の『▲▲▲』というところから読んでみて」と指示しなければならない。こちらは、頁はまだしも行まで確認しなければならないし、前記のように言葉の認識が苦手とみられる D 君は該当箇所を把握するまでに時間と労力がかかる。双方にとって負担が大きいのである。

また、オンライン型では身体接触が不可能なものも問題である。前記のように D 君は文章を読んでいるうちに寝てしまうことがよくある。そういう時に軽く背中を叩いたりして身体的刺激を与えることで眠気を覚ますことがよくあったのだが、オンラインでは使えない。尤も、この点は実際には問題が起きなかったのだが、これは状況を見越してこちらが教材の難易度を下げたこと、学校側の課題も「要請」中はさほど難易度が高くなかったことによる部分が多い。難易度の高い問題に取り組まざるを得なくなれば当然、問題化するし、そもそもテスト対応力の育成という点からは授業の質が下がったということに他ならない。また、一度に多人数で回線を利用する学校のオンライン授業（映像授業）ほどではなかったが、こちらの授業でも回線の混雑状況によっては接続不調が起こり、授業を中断せざるを得ないこともあった。

オンライン授業・映像授業の問題は改めて後述するが、D 君の場合、学校の映像授業についても問題が見受けられた。この学校の映像授業は内容の理解度をチェックするフォロー

アップテストがついている。ある時、「全問正解しました！！」とフォローアップテストの結果を得意げに見せてくれたのだが、肝心の文章内容を確認すると全く趣旨を分かっていないことが判明した。つまりフォローアップテストに実際の理解度が反映しないのである。尤も、教室での授業であれば生徒の問題・理解不足に気づいた場合、教師が即座に対応するということもできるだろうが、録画された存在の映像授業の教師ではどうすることもできない。結局、こちらで文章内容をもう一度解説して修正したが、こちらが気付かなければ「『自分が分かっていないこと』も分からない」状態でその単元の授業が進むところだった。

しかし、D 君にとっては「要請」中にオンライン授業の問題よりも切実な問題が起きるようになった。オンライン授業冒頭に体調を聞くと

「最悪です。」

「疲れました。」

「ボロボロです。」

という返答が返ってくるようになったのである。最初は「コロナ」に感染したのかとびっくりしたが、そうではなかった。母親が塾に缶詰めにしていて休む暇もないと言う。ある時など

「今日だけで、家庭教師（私）の他に 6 時間、塾があるんですよ！」

と訴えてきた。「これじゃ虐待だ！！」と言わんばかりの勢いだったが、8 時間勉強漬けにされればそういう気分にはなるだろう。ちなみに塾の授業形態は普段とあまり変わらないらしく、「密」になっている。これでは家庭教師をオンライン型にした意味もあまりない。

にもかかわらず、母親が塾へ追い立てているのは、基本的に C 君の母親と同じ理由である。とにかくこの休校期間を利用して勉強の遅れを取り戻したいのだった。元々、「成績向上のためにはこの休校期間をどう利用するかが勝負！」という認識は保護者間ではかなり

共有されており、D 君のご家庭でも父親が「この隙に一杯学力つけろよ！」と D 君に発破をかけていた。とはいえ、父親は「勉強漬け」の学校生活には批判的でむしろ青春に様々な体験を積ませたいという意向が強く、この発破も目標を与えて学校に通えなくなる喪失感を補う意味の方が強かったのではないかと推測している。

しかし、D 君は度々赤点を取る成績状況である。事態が悪化すれば A 君同様、学校にいられない状況になりかねない。子育ての責任を負う母親は常に息子が退学になる不安を抱えていたはずで、この不安から逃れようと思えば、「とにかく勉強しなさい！！」と息子を駆り立てるよりないのである。料金が割高な家庭教師の授業増加には限界があるので、必然的に塾へ息子を追い立てるということになる。学校の課題が消化できない場合もあったのだが、「あんたが家に帰って来てからゲームばかりしているからでしょ！！！」という具合。ただでさえ不満が鬱積している D 君も納得できるわけがなく

「勉強・勉強・勉強なんだから俺の楽しみはゲームしかないんだよ！！」

とやり返し、パソコンの向こうで陰悪な風景が繰り広げられることもあった。

ただ、「再開」後はスケジュールが楽になり、D 君も一息つけるようになった。また、勉強の効果はあったようで 1 学期の期末テストでは一定度、成績が向上した。現在は夏休みのため塾のスケジュールが厳しくなっているが、夏休み前半に父親が（「コロナ禍」ではあるものの）一週間、旅行に連れだしたり、夏休み期間が短かったりすることもあり、「要請」中よりは不満は少ないようである。

〔VI. おわりに〕

「コロナウィルスは社会に MRI やエックス線のように作用する」と言われる。つまり新型コロナウィルス（以下、「コロナ」）によって社会の実態が焙りだされるという趣旨である。筆者の知見は限られたものに過ぎないが、この 4 か月の経験からこの見解に強く同意するものである。

そもそも 18 歳以下については「コロナ」の感染・発症・重症化のリスクは極めて低いと言われる

(http://www.jpeds.or.jp/uploads/files/20200520corona_igakutekikenchi.pdf)。つまり警戒は必要であっても、「コロナ」自体は A 君～D 君のどの生徒にとってもさほど脅威ではないのである。

にもかかわらず、彼ら・彼女らがこれほど苦しまなければならない直接の原因は、人間を育成する場としてはあまりにも脆弱・貧弱な教育体制である。

この点は、「コロナ禍」で私が接した B さん～D 君の内、最も打撃を受けた B さんを見れば分かりやすい。B さんは結局、登校できなくなってしまったのだが、疾患による心臓の機能低下が遠因にあるとしても、彼女を追い詰めたものをそれに帰すことはできない。本稿で述べた点からそれを具体的に整理すると、(1) 成績維持への不安、(2) 自らの努力・葛藤の意義さえ否定する「要請」への衝撃、(3) 休校中の学校の対応の混乱による (1) の不安の増大、(4) 「アベノマスク」に象徴される自分の生命・健康さえ守らない安倍政権の愚策への衝撃、(5) 「再開後」の以前にも増して過酷なテストスケジュール、(6) 「感染対策」による過酷な教育環境である。

安倍政権の問題である (4) を除けば、これらはまさに現代の学校の在り方を象徴している。(1)・(3)・(5) は基本的にテストの点数（数字）が取れなければ問答無用で生徒を排除してしまう、言わば「点数至上主義」の所産であり、付け加えれば、にもかかわらず十分なテスト対応力を生徒に身に付けさせられない（勿論、それは教育の本来の目的ではないのだが）体制の所産でもある。(2) もこのような「主義」・体制が生んだ心理的反応と言える。(6) のある意味では過剰とも言える「感染対策」は「お上に目をつけられたら存続にかかわる」という現代の学校の立場の反映であることは否定できないであろう。

ちなみに、(2) の「要請」は安倍政権の政策だが、種々の問題があるのは明らかなのに学校が唯々諾々と従ったのもこのような立場に基づくことは明らかであろう。前記のように B

さんはこの「要請」後の動きについて「すべてが一瞬の出来事でした」と感想を漏らしたのだが、その衝撃の原因には日頃から「学び」の大切さを強調し、学校に通うよう事実上「強要」している教師と他の大人が、首相の「鶴の一声」であつという間に「学校に来てはいけません」と「豹変」したことも含まれているだろう。そんなに簡単に行かなくてもいいことになる学校なら何で私は苦勞して勉強しなきゃいけないんだ、というところではないかと思われる。これは(1)・(3)・(5)の背景である「点数至上主義」は何の意味があるのか—なんで点取り競争で苦勞しなければならないのか—という問題にもつながるが、この点も(どこまで明確かは別にして)Bさんは認識していたのではないかと思う。その意味ではBさんは学校・教師・他の大人たちの「軽さ」を見抜いていたのであろう。

(4)は安倍政権の問題であり直接には学校との関係はない。しかし、一国の政策である以上、その愚劣さは安倍首相個人の問題ではないだろう。それはこの国が「内容空疎」であることの反映であり、前述の学校・教師・他の大人の「軽さ」にも通じる問題である。この点もBさんは、認識自体はしていたのではないだろうか。

以上のような認識が総合されて、Bさんは学校に通う意欲を失ってしまったのではないかと思われる。前記のように、筆者との授業の中断後、Bさんは自室に閉じこもってしまう日があつたようなのだが、これは彼女が「私に近寄らないで!」と言っているのが決して「コロナ」だけではないことを物語っている。忌避の対象は、Bさんを翻弄した挙句に疲弊させ、結果的に心を擦り切れさせてしまった「軽い」大人たち全員であり、家庭教師が中断になったように、小5の時から現在の教育体制への適合を強いてきた筆者も含まれているはずである。「コロナ」はこのような大人たちとその造り上げた社会の象徴としてBさんには認識されているのかもしれない。

さて、以上の問題が程度の差こそあれ、Bさんに限定されないことは明らかである。(1)・(3)・(5)の背景である「点数至上主義」は、A君を学校からの排除の、少なくとも瀬戸際に追い詰め、C君・D君に「勉強漬け」の生活を強いることになった。(2)・(4)に象徴される「軽さ」がその背景にあることも同様である。

このような教育体制を生み出す政策が「教育改革」であり、その政策を生み出す社会が新自由主義社会であることは言うまでもない。子どもたちを追い詰めているのは「コロナ」ではなく直接にはまさにこの二点である。「コロナ」の役割はまさに社会の「実像」を焙り出す点にこそあると言える。とはいえ、冒頭で述べたように本稿で取り上げた子どもたちは比較的経済的に恵まれた家庭の子どもたちばかりである。本稿では触れられないものの、単純に考えればそうではないご家庭のお子さんはいっといふ過酷な状況にあるということになるだろう。つまり「コロナ」が焙りだしたこの社会の「実像」はもっと凶悪である可能性が高いと言える。

本稿はこのような「凶悪」を提示することはできず、「実像」の提示において不十分である。にもかかわらず、本稿が意義を持つと考えるのは冒頭に述べた通りだが、さらに具体的に補強すれば次の2点の問題を指摘できる。

第一に、「コロナ」の猛威にも関わらず、「点数至上主義」を生み出す教育体制は健在と見られることである。この点は偏差値体制の頂点であり受験競争の出発点とも言うべき東大・京大・早慶などが入試の出題において「コロナ禍」による「特別な配慮」はしないとしていることに明らかである (<https://www.asahi.com/articles/ASN706WSFN70UTIL024.html>)。勿論、「配慮」を行う大学もあるがトップがこれでは体制自体は大きく変わらないだろう。

なお、驚くべきはこの決定についてコメントした東大副学長・福田裕穂氏の認識である。「高校の状況を調査し、遅れはほぼ解消されると判断した。」「東大の入試問題は…多岐にわたる知識を総合的に判断する問題なので、現在の状況でも受験生は対応できる。」というもの。高校が遅れを取り戻すと言ってもカリキュラムを消化するだけで、生徒がきちんとその内容を身につけられるかは別問題である。また、「多岐にわたる知識を総合的に判断する」（ということになっている）問題に対応するには「教育産業」における長期に渡る「テスト用」の訓練が必要である。「コロナ禍」によって「テスト用」の訓練を中断せざるを得なくなった生徒はその分、テストに対応できなくなるはずであろう。百歩譲ってこの認識を認めるとしても、Bさんのように学校生活を続けられなくなった生徒は排除されてしまう。現在の教育体制が現実から目を背けた「妄想」に基づいていることを如実に示しており、前述の大人の「軽さ」を物語るコメントと言える。

第二に、健在どころか「コロナ禍」がこのような体制のますますの強化につながる可能性があることである。一例としてはオンライン授業（及び映像授業）の拡大の提唱が挙げられる (<https://www.asahi.com/articles/DA3S14589778.html>)。筆者もネット時代にこれらの授業形態の導入は当然と考えているが、「コロナ禍」での経験からは無批判に導入を拡大するのが適切とは思われない。

例えば、D君のように（1）教材が揃えられない、（2）教材を円滑に演習できない、（3）解説に集中できない（寝てしまうなど）といった生徒は教室にもいるはずである（事実、D君も学校に通っているのだ）。教室であれば（1）は周りの生徒がフォローする、（2）・（3）は教師が丁寧にみることで対応できる。しかし、（1）のフォローはオンライン授業・映像授業双方で不可能だし、（2）・（3）の丁寧な対応も映像授業では同様である。オンライン授業では（2）・（3）の対応はある程度可能だが、既述のように視覚情報は「対面」型に比べ圧倒的に不足している。集団授業であればパソコン画面もさらに分割されるのでますます拍車がかかるだろう。その上、身体接触ができないのも前述の通りである。小学生などの場合、軽く背中をなでるなど少し身体接触するだけで緊張が解け、笑顔を見せてくれることはよくあり、低年齢になるほどこのような問題は顕著になると思われる（勿論、教える側がそうと認識していない場合も含め、セクハラ・体罰などは論外である）。

限られた経験に過ぎないが、筆者の印象では本来、この授業形態で教育内容を身に付けられるのは大人の言うことをよく飲み込み、その通りに行動できる「いい子」であるように思われる。とすればその無批判な導入の拡大は必ずしも「いい子」にふるまえない子どもをますます排除することにもつながりかねないのではなかろうか。前述のように導入の拡大自

体は当然としても、その課題をしっかり把握する必要があると思われるが、前記の提唱は必ずしもそれを踏まえていないように思われる。これでは「コロナ」を契機に却って「教育格差」を拡大させることにつながりかねないだろう。

以上 2 点は経済的に厳しい家庭の子どもが教育の場においてますます排除される可能性が強まることをも示している。とすれば、本稿で述べた筆者の体験もこのような状況の克服の上で意義を持つと考える。

以上のような「コロナ禍」での体験の中で、筆者が改めて実感したのは「教育改革」・新自由主義社会がいかに子どもを蔑ろにするかという点であった。A 君の項で述べたように「out of 眼中」の扱いにしているとしか言いようのない「要請」はこのような体制の延長線上にあったのではないかと思えてならない。冒頭で述べたように軽々しく発言はできないものの、この「要請」によって自死してしまった二人は、ひょっとしたらその中にこれまで自分を追い詰めてきたものを見てしまったのではないだろうか。ちょうど B さんが「要請」後の教育現場の混乱の中で、大人の「軽さ」とこの国の「内容空疎」を認識していったと見られるように。

ただし、「コロナ禍」の子どもたちを単に過酷な状況で苦しむ「被害者」とステレオタイプで認識するのが正しいとは思われない。本稿では触れなかったがあまり影響を受けていないと見受けられる生徒もいる（これはこれでまた事情があるようである）。また、C 君・D 君の「要請」中の努力は成果につながりつつあり、B さんも今回の試練を糧にかえる可能性を持っている。どんなに過酷な状況であっても子ども・若者はそれを成長の糧にし、自分の未来を築き上げる力を持っていることは踏まえるべきであろう。

しかし、以上を踏まえた上でなおかつ子どもたちを追い詰める「教育改革」・新自由主義社会の「実態」を凝視する責任を大人たちは負っていると考ええる。連日、「感染者数」が報道されるが、それによって我々が「コロナ」の感染状況にのみ目を奪われ、本来の責任を見失うことがあってはならないだろう。本稿はかかる課題への対応の上で一定の意義を有していると考えるが、いささかでも具体的に諸賢の参考になれば幸いである。

(2020.8.18 摺筆)